

皆さん観て下さい

元・臨済宗妙心寺派管長
河野 太通
元・全日本仏教会第29期会長



遺体を焼く「かま」の内部の壁面には、人体の脂質が濃厚にこびりついていて、それを篋でこき取って掃除をする。父親弥太郎の死体を焼くことになった「かま」の掃除をする、ふじ子の独白で芝居は始まる。

父親が「オンボ」と呼ばれる仕事をしている事で、世間の不当なまなざしに悩みながら、ふじ子は人間の真実に気付いていく。母、たね子は障害を持つ身の故に、ここに嫁いできた。花岡鉦山を脱出して、憲兵に殺害された韓国人の、火葬許可書のない遺体を焼くことを、ガンとして拒絶する弥太郎に代わって、涙と共に障害の身を押しして焼くたね子の姿に、観無量寿経の「母に悲恩あり」の語がひびいた。

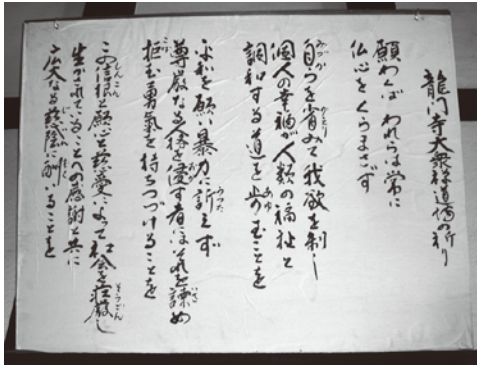
死体を焼くことを職業にする人ができる以前は、部落の家々が葬儀の仕事はすべて分担して行っていたのである。かの戦争

中、私も九州の伯父の家に居て「オンボ」を務めたことがある。

この釈迦内板唄は人権、戦争など現代社会が抱える諸問題に一条の光をさしかけている。また運命から逃れるのではなく、それを引き受けて生きるとき、人は真実を見出し、美しき豊かにたどりつく事を教えている。

ふじ子が言う「死ねば、みんな灰になる」と、この世界の究極の真理に今、生かされている事に、ふるえるような厳肅な充足感を覚えた。山の畑いっぽいに弥太郎が人の灰で育てたコスモスが咲く、「花は死んだ者の顔だや」と。

いま秋になると、やはりコスモスが休耕田に咲き乱れる。皆さん観て下さい。



古くて新しい... お寺の劇場

2011年、11月10日臨済宗妙心寺派本山の花園会館で人権研修会に招かれました。

全国から参加された新総代さん、ご住職の研修会の一環で「釈迦内板唄」の観劇会、その後、教学部長栗原正雄師、花園会本部長林学道師と由井さん、有馬さん交え、パネルディスカッションが行われました。

普段見られない男性ばかりの劇場と、研修会という事ではじめは緊張感漂う客席でしたが、舞台が進むにつれ、あたたかな会場になっていきました。パネルディスカッションでは、私たちのルーツになる、新制作座の話も飛び出し、私たちが逆に驚かされる、笑いの絶えないひと時でした。

14日は河野太通老師が住職を務める、姫路市龍門寺の本堂公演が行われました。原発事故直後、真っ先に原発に依存しない社会の宣言を発表した妙心寺派。太通老師のお寺の庫裏にも「道場の祈り」が掲げられ、まるで憲法前文のような文面に感激するとともに、改めて「社会の中の仏教」の役割の大切さを実感しました。

希望舞台「つうしん」2012.01.20号発行より

